

医療プレミア特集

ボランティアに生涯をささげた喜谷昌代さんに学ぶ

医療プレミア編集部

2021年3月9日



喜谷昌代さん＝大阪市北区の大阪中央公会堂で2009年5月27日、宮間俊樹撮影

英国発の「子どもホスピス」を手本にした重い障がいがある子どものための医療型短期入所施設「もみじの家」（東京都）の開設に尽力し、2019年6月に83歳で亡くなった喜谷（きだに）昌代さんを思い出す。5年以上前のインタビューで、お会いした。昌代さんは国際ボランティアの草分けでもあり、そんな社会と向き合う生涯を記した「ひとすじの光 喜谷昌代の生涯」（文芸春秋）が出版された。昌代さんは、戦地での救護活動などの骨太の歩みからは想像がつかないほど、可愛らしいすてきな女性だった。

【東京地方部・賀川智子】

2016年12月、昌代さんとの出会いは毎日新聞の連載「母校を訪ねる～聖心女子学院編」（東京本社版）のロングインタビューだった。昌代さんは拠点としていた英国から一時帰国していて、ザ・プリンスさくらタワー東京のロビーで待ち合わせた。

そこに現れたのは小柄できゃしゃな女性で、ふわふわしたグレーカラーの髪とつぶらな瞳が印象として残っている。1階カフェでのインタビューで、昌代さんは幼少期の思い出を驚くほど鮮明に語ってくれた。

——空襲で焼け落ちた自宅から、聖心の校舎が焼けるのが見えました

——疎開先の葉山の小学校でいじめられ、聖心のマザー吉川校長に勧められ寄宿生になりました

——そこで空襲で黒焦げになったお皿にサツマ芋をのせて食べました

——フィーストというカトリックのお祝い日にアイスクリームを食べるのが楽しみでした

美智子さまにボランティアをすすめられ

昌代さんは1936年、東京都品川区に生まれた。父は実業家で衆院議員も務めた飯塚茂氏。カトリック系の私立校、聖心女子学院（東京）の幼稚園から高等科まで通い、2学年上だった上皇后美智子さまとも親交を深めた。

その出会いはその後の昌代さんの人生の転機にもなったようだ。取材メモをひもとくと、私にも美智子さんとの思い出を語ってくれている。

「美智子さまはとても運動が得意でした。中学1年の運動会の学年対抗リレーでは美智子さまも（私も）同じリレーの選手で張り切って速く走っていらした」

昌代さんは慶応大で学んだ後、日本航空の客室乗務員になり、結婚を機に退職。64年の東京五輪の際、日本赤十字社のボランティア活動に参加するようになった。それをすすめたのが美智子さまだった。



「もみじの家」の部屋を見学する喜谷さん＝キッズファミ財団提供

戦場で兵士や民間人の救急介護に

その後、夫の海外赴任先の7カ国で約40年にわたり赤十字のボランティア活動に従事した。ベトナムのサイゴンでは、戦場で傷ついた兵士や民間人の救急看護を、独ベルリンでは唯一の外国人、女性隊員としてポーランドで救援物資を配って回った。

国際ボランティアだけではなく、その足跡を語るうえでもう一つ、欠かせないことがある。重い障がいがある子どもたちに生涯にわたり注ぎ続けた優しいまなざしだ。

英国で子どもホスピスに感銘「日本にも」

昌代さんは1985年から英国に移住し、91年に日英の障がいがある子どもたちの交流「もみじプロジェクト」を始めている。その後、英国発祥の「子どもホスピス」に感銘を受け、「日本にも設立したい」とゼロから関係者に働きかけた。

そして、財政面や制度面など多くの壁を乗り越え、2016年に国立成育医療研究センター（東京都世田谷区）敷地内に開設したのが、障がいがある子の医療型短期入所施設「もみじの家」だ。構想から開設まで10年以上たった。

昌代さんの夢は膨らんだ。「同じような施設を全国にも」。そんな思いから昌代さんは同年、「重い病気を持つ子どもと家族を支える財団」（キッズファム財団）を設立した。

67歳で難病のパーキンソン病を発症し、病と闘いながらも亡くなる直前まで障がいを持つ子どもや家族のために尽くした。財団スタッフの五嶋（ごしま）くみ子さんが振り返る。

「どんな時も心の底から人のために尽くし、相手を思いやる温かな心を持っていました」

「本を出すので手伝って」という言葉残し他界

実は五嶋さんは、昌代さんが亡くなる3カ月前の2019年3月、英南東部ウインザーの昌代さん宅を訪れている。昌代さんがこう語りかけたという。

「孫たちから、ずっと本を出したらいいのにと言われてるのよ。くみ子さんにお手伝いしていただけたらうれしいわ」



医療型短期入所施設「もみじの家」＝キッズファム財団提供

でも、五嶋さんは出版は難しいと一時考えていたが、英国から届いたのは昌代さんの訃報だった。背中を押されたような気がし、五嶋さんは確信した。

「昌代さんと出会った方々のお話を集めて本にすれば、さらに多くの方が昌代さんと出会える」

障がい児や家族との交流も

出版にあたり、五嶋さんら財団スタッフらが約1年かけて20人以上の関係者にインタビューや寄稿を頼んだ。そして、焦点を絞るのではなく、生い立ちから赤十字での活動、もみじの家開設までの軌跡、美智子さまとの交流など正確にしていねいに編集をし、書籍化した。

そこでは、障がい児やその家族との交流も描かれている。

本にも登場する松本直子さんの息子、虎大（とらひろ）君は難病の18トリソミーで産まれた。昌代さんとは同じ聖心女子学院の出身という縁で何度か手紙をもらい、16年から食事を一緒にするなど交流を始めたという。松本さんが昌代さんとの思い出を語る。

「喜谷さまの行動力と前向きなお気持ちに圧倒され、感激しました。虎大を抱っこしてくださったり、優しくしてくださったりしたことを鮮明に覚えています」

「多様性のある社会を知ってほしい」

本は希望する学校にも寄贈され、財団HPから購入した書籍の売り上げは重い病気を持つ子どもと家族のための活動に使われる。

五嶋さんは、取材や編集作業を振り返りながら話す。

「昌代さんは決して名誉のためではなく、心の底から人のために尽くし、相手を思いやる温かな心を持っていました。それゆえに彼女の思いを実現するために、多くの方々が惜しみなく協力してくれました。彼女がどんな困難な環境下においても決して諦めることなく、最大限の努力を惜しまなかったことを多くの人に知ってもらいたい。そして、若い方たちにも

読んでもらい、他人を思いやる心や諦めない気持ち、多様性のある社会を知ってほしい」

聖心で学んだ博愛精神 「最悪の時でも感謝を見いだす」

五嶋さんが言うような、本の中からもあふれ出る昌代さんの博愛の精神の原点はどこにあるのだろうか。インタビューで私に話してくれたことをいま思い出す。

「祈りと神様の感謝の気持ちは自然と聖心の日常の中で学びました」



寄贈したクリスマスツリーの前で記念撮影する喜谷さん夫妻＝キッズファム財団提供

聖心時代に培われたキリスト教の教えに影響され、もみじの家を設立した原動力もそこにあったようだ。

「やはり神様のためというか。神様が与えてくださった仕事だから、一生懸命やろう、神様がお与えになったお子さんだから、お世話しようという気持ち」

そして、昌代さんはこうも付け加えた。

「つらいことがあっても、いつもいい面を見るということに努力をして、最悪の時でも感謝を見いだす、それは聖心で学んだことです」

ボランティアは自分が喜びを得る方法

昌代さんにとってボランティアとは何でしょうか――。そんな問いかけに昌代さんははっきりとよどみなく答えてくれた。

「人にしてあげるのではなく、自分が喜びを得る方法です。若い方たちも、少しでもつらく、苦しい思いをしている方に出会ったら、耳を傾けて、その方たちが望むことを知り、一緒に歩いて、その望みを少しでも満たすようにすることができればいいのではないのでしょうか」

インタビューの間も「何かスイーツはいただかない？」とすすめてくださったり、合間の何気ない会話で私の長男と次男のことを「2歳差はちょうどいいわね」と励ましてくださったり……。 「失礼のないように」と緊張していた私に気を使ってくれた。

別れた後、初めてお会いしたのに、何かすごく安心できる温かいものに包まれたような、とても不思議な気持ちになったのを覚えている。

新型コロナ感染症の広がり、多くの方が困難を抱え、生きづらさを感じている。特に若い高校生で進路に悩む人も多いと聞くので、本書をぜひ読んでみてほしい。昌代さんの生涯と思いを知ることで、これまでとは少し世界の見方が変わり、日々を前向きに過ごせる。そんな気がしている。

<[医療プレミア・トップページはこちら](#)>



出版された書籍＝キッズファミ財団提供

* 「ひとすじの光 喜谷昌代の生涯」（文芸春秋、1870円）は書店のほか、財団HP (<https://kidsfam.or.jp/>) でも購入できる。また、財団は「この本を手にとった誰かの未来の何かになれば」と希望する学校への寄贈もしている。寄贈を希望する学校関係者は財団のメールアドレス (zaidan@kidsfam.or.jp) まで。

医療プレミア編集部

毎日新聞医療プレミア編集部は、国内外の医師、研究者、ジャーナリストとのネットワークを生かし、日々の生活に役立ち、知的好奇心を刺激する医療・健康情報をお届けします。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.